

橋をつくるために

異文化との対話

注目した教皇の言葉を二つ紹介します。一つ目は、グローバル化する世界に対して教会はどのように貢献できるのか、というドミニック氏の問いに対する答え。

対話によってです。対話なしでは、今日、何も可能とはならないとわたしは思います。

・・・(中略)・・・対話は文化と文化のあいだの「大きな橋」です。

二つ目は、神、平等とコミュニケーションに関するやり取りの中での言葉。

本物のコミュニケーションとなるためには、身を低くしなければなりません・・・

父親・母親は、子供とコミュニケーションしようとする時、子供の言い方をまねるので、正確な話し方をするのではなく、子供のことばで、「ば、べ、び」と話すのです。

親は身を低くします。・・・(中略)・・・私が思うに、平等であるためには相手のレベルに身を置く必要があります。

「対話」という言葉は、私自身の異文化体験に重なります。長年の体験で行き着いた考えは、自分と異なる考えや価値観を100%受け入れる（消化する）のではなく、「他者が自分と異なるという事実」を受け入れることが大事ということです。「世の中には考えが異なる人がいる」という前提があれば、相手に耳を傾け、冷静に意見を言えるようになります。

文化に基づいて形成される価値観や社会通念が異なる人同士が交流すると、コミュニケーションの仕方（言動）次第では摩擦や衝突が生じます。典型的な例は、「この国（自国）ではこうする。あなたの仕方や考え方は通じない」と一方的に否定し、それに対して「自分の国ではこうするから理解できない」と言い返し、堂々巡りになることです。「郷に入れば郷に従え」というのは理にかなっていますが、通念が全く異なる異文化の接触では、その結果論に至る経緯の理解が欠かせません。それを可能にするのが対話であり、その方法が教皇の言う「相手のレベルに身を置く」ということです。

例えば、日本で異国の人と交流し、相手の振る舞いや考え方を理解し難い、または標準的（典型的）な日本人には受け入れられないと感じるときは、頭ごなしに否定するのではなく、日本で通用しにくい・理解されにくい理由（相手の言動を日本人がどう感じるか）を説明しつつ、相手の国では同じ状況でどのように考え、行動するのかを知るのが大切です。様々な状況で自身や日本人の振る舞いと考え方がどのように映っているか、相手の国ではどのように解釈されるかを尋ねてみると良いでしょう。こうすることで、社会通念の違いが分かります。これが相手を理解することです。さらに言えば、自分から見ると相手は外国人であり、異質な存在と思うでしょうが、同様に相手にとっては自分が外国人です。つまり、どちらも言語、文化、価値観も異なる存在なのです。

現代のグローバル社会では、意見をはっきりと言える力が必要とされていますが、教皇の「対話」と「平等なコミュニケーション」に対する考えを読み、何よりも大切なのは相手に耳を傾ける力であるというのを改めて感じました。その一つが、「人間の最悪の敵は、聞こうとしない人間です」という言葉です。自己主張だけでは一方通行であり、対話ではありません。相手の考えに耳を傾ける配慮（リスペクト）が大切です。互いに共通点と異なる点を認め合うことで歩み寄り、対話が成り立ちます（これが出来ていないのが、日本も含めた様々な国の首相や大統領です）。

私がこれまで出会ってきたキリスト教信徒に共通するのが、この対話の基本です。あらゆる場面で自分の価値観にとらわれて意見するのではなく、相手の考えを学ぶ。個人的な事柄で問題が起き、たとえ相手に非があろうと、相手にも事情があるのだから、不満や怒りに任せて物を言うのではなく、冷静に話を聞くのが賢明という考えです（実際にやってみる姿を見習おうとしますが、毎回できるものではありません）。

本書は、読者の日ごろの「対話」の在り方や「架け橋」としての役割を振り返るのに良いでしょう。